謎の女

平林初之輔

青空文庫

左手には三浦半島から房総半島の淡い輪郭が海の中に突きだし

ている。

右手には伊豆半島の東側の海岸線が鋸歯状に沖へ伸びている。

正面には大島が水平線に浮いて見え、遥か手前には、

初島がく

つきりと見える。

すぐ眼の下には、 熱海駅前の雑踏や、 小学校のグランドに飛び

まわっている子供らの声が、 雲雀の囀るように聞こえる。

龍之介はMホテルのテラスの籐椅子に背をもたせて、身体いっぱ之介はMホテルのテラスの籐椅子に背をもたせて、身体だ

謎の女 ックがスポンジボールでキャッチボールをしている音が単調に聞

ぱいに日を浴びて、眼をつむっていた。すぐそばで、ホテルのコ

彼女は二十二三の年格好で、見たところ、お嬢さんとも、奥さん こえる。一月の末だったけれど、ぽかぽかと暖かかった。 ぼんやり眼を開いてみると、すぐそばに山野さんが立っていた。

ともつかなんだ。ホテルでも、この女が何者かわからないと見え

て、あたらず、さわらずに「山野さん」と呼んでいた。 「今日は暖かいですね」

「ほんとに暖かですわ」 龍之介はあわてて言った。

それっきりで会話はおわった。 両方ともあまり話ずきではなか

ったし、 別に話をする共通の材料もなかった。それで二人は、

た。それでも二人とも、ひどく退屈だったので、一日のうちに五 を合わせれば五度に一度は、きまり文句の挨拶を交わすだけだっ

度や六度、パーラーや、玉突き場で顔を合わせぬ日はなかったの で、一週間あまり滞在しているうちに、自然に顔馴染になってし

まった。

「貴方梅園へいらして?」

「いいえ、まだ行きません」

「そうですか、じゃ見てくるかなあ」 「ちょうど今が見頃だそうですわ」

龍之介は自然に対しては、あまり興味をもっていなかったので、

謎の女 6 わざ見物に行く気は起こらなかった。それにどんなに見に行きた さん生えて、それに花が咲いているにすぎんのだと思うと、わざ 梅園などちっとも見たいと思わなかった。要するに梅の木がたく

「いらっしゃるのだったら、あたしもおともさせていただきます

子でばつを合わせたのだった。

ことはできないたちだったので、お座なりに、独り言のような調

いにしたところで、一人っきりで、一人っきりの女を誘うような

隅まで読み返しているよりも、外へ出た方がいくらかましなよう く退屈だったので、誘われてみると、パーラーで、新聞を隅から 「そうですね」彼には相手の返事が意外だった。それでも、ひど

車の中で、二人はだまっていた。

車を降りてからも、沈黙がつづいた。

「ちょうど盛りですね」 龍之介は話の緒口をきってみた。 二人は、二三歩間隔をおいて、梅林の中を歩いた。

答えはそれっきりだった。

「そうですわね」

思わないでもこうした場合に、 龍之介は不思議な女だと思った。大抵の女なら、 「まあ素敵ですね」とか何とか仰ぎ 別に美しいと

ょ うさ ん でもあって、東京の場末の町でも歩いているときのように無感激 な言葉をつかうものだ。それだのに、この女は、 何か用事

「ちょっとおやすみにならなくって?」

なのだ。

十分間ほどで、梅林をあらかた一巡してしまってから、 山野さ

んは一つのベンチのそばへ辿りついて言った。

「休みましょう、お疲れになったでしょう?」

龍之介はハンカチを出して、ベンチの塵をはらって、席をすす

めた。

「どうもすみません」

の犬がすぐそばの日向でじゃれついていた。 彼女はぐたりと腰をかけた。龍之介も並んで腰をかけた。

「ねえ島さん、あたしたちがこうしているところは何と見えるで

しょう?」

不意に彼女はこんな質問をした。

「そうですね」龍之介はちょっときまりが悪いので口籠った。

「やっぱりお友達と見えやしないでしょうか? 夫婦や兄弟にし

ちゃ、他人行儀すぎるし、恋人同士にしちゃ年をとりすぎている

9

「でも、これくらい口もきかない夫婦だってあるでしょう?」

龍之介は返事に困った。

「そりゃないこともないですけれど……」

彼女は、手を伸ばして犬の頸をなでていた。彼女の顔は、

らくのうちに見違えるように明るくなっていた。

「貴方、あたしお願いがあるんですけれど、きいて下さらない?」

彼女は躊躇しながら、下をむいたままで言った。

「僕にできることなら何でもしますよ」

龍之介は若い婦人から物を頼まれたことに、嬉しさを感じなが

ら言った。

「どんな失礼なお願いでもゆるして下さる?」 「かまいませんとも、何ですか?」

「貴方まだ当分こちらにご 逗 留 でいらっしゃいますか?」 あなた

「ええ、まだ十日ばかりいるつもりです」

「こちらでなくちゃいけないんでしょうか?」

「そんなこともないんです。ただ急ぎの仕事なんで、とうぶん居

場所を人に知られたくないんです」

らない? ちっともお邪魔にはならないようにしますわ。あたし のことを何にもきかないで、ただ貴方がどこかにご滞在中だけ貴 いなんですけれど貴方の奥さんにして、どっかへつれてって下さ 「そうでしたらなおさら都合がいいんですわ。あたし、妙なお願

方の奥さんという名前にして下さればよいのですけれど……」

どういう風に返事をしていいかわからなかった。だが相手は真面 龍之介は、あまりに意外な、相手の言葉を真面目にとりかねた。

目だった。

すの。 あたし偽名してあのホテルにとまっているんですけれど、今にも これには深い事情があるんですの。でも今は申し上げられません 「だしぬけにこんなお願いをしてきっと 吃 驚 なすったでしょ。 ただね、あたし、とうぶん姿を隠してなくちゃならないんで いま家であたしのことを一生懸命さがしているんですの。

見つかりやしないかとおもってひやひやしていますのよ。

それに

は少し固くなって答えた。 ければ、 何かと思ってるでしょう。貴方の奥さんということにしていただ う。ホテルじゃ、きっとあたしのことを、横浜のチャブ屋の女か でもなかった。 女一人であんなとこにいますと、いろんな噂をたてられるでしょ 「それがいま申しあげられないんですの、あんまり我が儘ですけ 「いずれにしても、もう少し事情を打ち明けて下さらないと」 しかし、おいそれとすぐに引き受けられるような性質の願い事 龍之介は、内心、これは面白いアバンチュールだと思った。 ほんとに安心していられるんですけれど……」

彼

13 れど、すっかりあたしを信用して、お願いをきいていただけない

でしょうか?」

謎の女 彼の好奇心が、もう少し相手の素性をさぐってみたくなったのだ。 めに別に迷惑がかかるようなことはなかろうと信じていた。ただ 龍之介は相手をはじめから、 直覚的に信用はしていた。そのた

からね。それに、貴女はひどく沈んでいらっしゃるけれど、時々、 んなことを頼むということは今の悪い人間にはできないことです

「そりゃ、僕は貴女を信用してはいます。見ず知らずの僕に、こ_{あなた}

女が僕を信用して下さったんだから、僕だって貴女を信用しない 貴女の顔が青空のように澄み渡って明るくなることがありますよ。 わけにはゆかないじゃありませんか。だが、僕を信用して下さっ あれは本心の素直な人にでなければ見られない顔です。それに貴

さるわけにはいきませんか?」 たついでに、もう一歩すすめて、ほんの少しでも事情をお話し下

女は心の中で何か争闘しているかのように、眼を宙にして、し

ばらくためらっていた。

られませんわ」 「あたし、貴方のお職業を存じていますので、やっぱり申し上げ

言るんですか?」 。「ああ、僕が新聞記者だからですか、それで信用できないと 仰ぉっし 龍之介は 速 口 に言った。彼は相手が自分の職業を知っていた

からだ。そして、自分の職業を思い出すと、こいつことによると ことを少し驚いた。というのは彼自身、自分の職業を忘れていた

ない。

だが――と彼は思った――相手は、自分の職業を知ってい

たら、 だ。そして新聞記者としての自覚をもって秘密をさぐろうと思っ できた。 報道価値のある材料じゃないかなという考えが同時に頭に浮かん 相手はたかが一婦人だ。どんな秘密だって探れないことは 秘密を売ることは新聞記者にとっては不徳義ではないん

業意識と人道意識とがはげしく争闘をはじめた。 相手の信頼に報いる義務がある。しかし―― 自分にあんなことを頼んできたんだ。してみると人間として ―彼の心のうちで、

兀

女はかすかに笑いながら言った。

また新聞記者はそうでなくちゃいけないんですもの――」 っていらっしゃっても、つい職業意識にまけてしまうもんですわ。 「ええ、新聞記者の方は、どんなにご自分では秘密を守ろうと思

どんな風にするんですか?」 女の仰言るとおりにしましょう。しかし、夫婦になるって、一体 「じゃ、 僕は何もおたずねしないことにしましょう。そして、

だが虎穴に入らずんば虎児を得ずという一かばちかの気持ちで、 龍之介はまだ職業意識をぜんぜん放棄したわけではなかった。

降って湧いた奇妙なアバンチュールに身をもってあたってみるこ

17

「さあどうしたらいいでしょうか?」

謎の女 はいっこう先の成算はないらしかった。 山野さん(とうぶん彼女をこう呼びつづけてゆくより外はない)

今まで別々に、ちがった名前で暮らしていて、今日から突然、 は夫婦だというのも変ですからね。それに、あのホテルじゃ、 「いずれにしても、あのホテルにいるわけにはいきませんねえ。

のことはよく知っていますから」 「そうですわね、とにかくあのホテルは住みかえなくちゃ……」

「そしたら、名前はどうしましょうか? 僕の名前にしましょう

か、それとも二人ともかえましょうか?」 「偽名がわかるとうるさいんじゃないですか? あたしそれも心

19

「ここのAホテルじゃどうですか?」

謎の女 「じゃ、 「あそこはあたし知っているんですの」 「あそこもよく知ってるんですよ」 鎌倉のKホテルは?」

「それでは逗子のNホテルはどうです?」

「あそこへも行ったことがありますわ」

「それでは、いっそ日本の宿屋にしますか?」

宿屋は気が進まぬらしかった。 なぜか道子(これから彼女をこう呼ぶことにしよう)は日本の

「ではいっそ東京へ行きましょうか?」 「貴方さへお差し支えなければ、あたしそれがいちばん都合がい

ましょう。Sホテルや、Tホテルだとどうしても人目につきやす ゃないんですから。それじゃ、少し騒々しいけれどMホテルにし く暖かいところへいらして、東京へ帰るんじゃ、貴方にお気の毒 ひょっと知った人にあったら、それっきりですから。でもせっか わ。こういう狭い所だと、どうしても眼につきやすいんですもの。 いですから」 ですわ」 いんですけれど。隠れているには東京が一番いいように思います 「いいえ、僕の方はどうでもいいですよ。どうせ頭を使う仕事じ

わたしほんとに救われたような気がしますわ」 「じゃ、そうお願いいたしますわ。どうも有り難うございました。

五.

「じゃぼつぼつ帰りましょうか、やっぱり暖かいようでも外は寒

いですね」

二人はベンチを起ち上がった。

うな、妙な感じがした。 二人で並んで歩いているとき、 龍之介は何だかくすぐったいよ

写真屋が、写真をすすめたり、枝つきの蜜柑を売っている物売 「奥さん、お土産にいかがです」とすすめたりするのを聞

いても、何となく甘ったるいような気がした。

ない女に、名ばかりの夫婦になってくれと頼まれるなんてことが、 から先、どんな冒険が展開するだろうと考えると、 ンチックな小説の主人公になったような気がした。そして、これ 小説でなら知らず、現実の世界にあり得るだろうか? 彼はロマ の座席へ座るのにも、以前とちがった感覚があった。素性も知ら 二人は、運転手が扉をあけて待っている車の中へはいった。 何となく心が

「夫婦ということになると別々の室じゃおかしいでしょうか? 車が走りだすと、しばらくだまっていた道子がとつぜん言った。

躍った。

あたしさっきからそのことばかり心配していたんですけれど」 龍之介もそのことをまだ気がつかずにいたが、むろん夫婦が別

謎の女

彼はそれを変だとは言えなかった。

々の室をとるということはおかしいにきまっている。それでも、^^

「Mホテルの室にはベッドは二つあるでしょうか?」 「そうですね、おかしいかもしれませんね」

しかし、夫婦でない二人の男女が、たといベッドは別になって 同じ室に鍵をかけて寝るということは容易なことではな

「そりゃ二人の室なら、ベッドは二つありますが――」

いても、

かった。 夫に発見されたら――龍之介はいまさら大変なことを承知してし もし道子が誰かの夫人で、二人で同じ室にいるところを

が同じなら断るというわけにもいかなかった。 まったと思った。しかし、いったん承知したことをいまさら、室

の人たちの注意をひいて、眼をつけられやしないかと思いますわ」 「あたし、夫婦といいながら別々の室にいちゃ、かえってホテル

やありませんか」 「貴方さえ承知して下されば、あたしの方はそれに越したことは」あなた 「それもそうですね、では、かまうもんですか、一つ室でいいじ

ありませんけれど。でも嫌な気持ちがなさるでしょう。こんなこ

とを女の方からお願いしちゃ」

「お互いに信じあってさえいればなんでもないですよ。心のうち

は光風霽月ですから」

かった。ほんの顔見知りというだけの男女が、一つの寝室の中で 龍之介はこう言ったものの、彼の心中は決して光風霽月じゃな

謎の女 26 にない予感がした。 これから十日間も生活するのだと考えると何か無事ではすみそう

車がホテルのポーチに着くと、二人はほとんどすれすれに並ん

でホールへはいっていった。

その翌日、道子は黒い天鵞絨の服を着て、 龍之介は茶の背広を

着て、二人は一つの自動車で駅まで着いた。

テルの若い事務員たちがいまいましそうに言った。 二人を乗せた車が出ていったあとで、玄関先まで送ってきたホ

野郎、しゃあしゃあしてどっかへつれ込む気なんだろう」 「ちえっ、馬鹿にしてるよ、昨日一日ですっかりできやがって、

たった六日で、とんびに油揚げをさらわれてしまうなんて」

「こちらこそいいつらの皮さ、今月一杯ご厄介になるなんてた奴

「おれがはじめに睨んだとおりさ、きっと高等淫売だよ、ただの

女じゃないと思ったさ。何のことはない女郎蜘蛛が巣を張ってま ってたようなもんさ。そこへあの馬鹿な新聞記者がひっかかった

てわけさ。今に骨までしゃぶられるだろう」

「そう、やくな、やくな――」

二人は東京行の青切符を買って、向かいあった座席を占めた。

27 道子は帽子をまぶかにかぶってうつむきがちで、大船辺までほ

つぶっていた。

謎の女 「貴方どんなお仕事をなすってらっしゃるの?」

筆記しますわ、ぼんやりしてちゃ退屈ですから、外へはうっかり

「あたしお手伝いしますわ、貴方が口で言って下さりゃ、あたし

出られませんし――」

談という記事を書かされちゃったんです。もっとも材料はここへ

「つまらない仕事ですよ、二週間社から暇を貰って、議会弥次漫

だしぬけに彼女は低い声で訊ねた。

もってきているんで、ただ書きさえすりゃいいんですがね」

こう言いながら、彼は網棚の上の鞄を指さした。

とんど黙っていた。龍之介もシートの背に上体をもたせて、

眼を

ないのは幹部ですよ」 るのですからね。どこでもそうですが、新聞社でもいちばん頭の さえ書いてりゃ読者にも受けるし、読者よりももっと幹部に受け 「手伝っていただく程の仕事じゃないんですよ、ほんとの与太原 新聞の記事なんて、馬鹿にならなきや書けませんね。与太

「ところで」、と龍之介は不意に思い出して言った。 「そうでしょうね、今の若い方はたいてい頭が進んでますから」

さんではあんまり改まりすぎますし、貴女が僕のことを島さんと なきゃいけませんね。たとえば僕が貴女のことを呼ぶ時に、道子 「僕たちは夫婦というふれこみにすると言葉使いもいくらか変え

言っちゃおかしいですからね」

謎の女 うすることにしましょうか?」 「とにかく貴女は、僕のことを、ねえとか、貴方とか 仰 言って 「そうね、中々これで、俄夫婦の生活にも準備がいりますね。ど

には、島と呼びすてにして頂くんですね」 いただくんですね、そして第三者に向かって言う必要のあるとき 「貴方はあたしのことを?」

も言えないし、みっちゃんにしますか?」 「そうですね、みいちゃんじゃあんまりやさしすぎるし、道子と

「大好き、あたしみっちゃんという名前!」 「それでかまいませんか?」

「ええ」

がするんですよ。急に貴女が他人でなくなったような、一種の親がするんですよ。 「じゃすっかり打ち合わせはすんだわけですね。僕何だか妙な気

しみを感じますね」

道子は笑いながら冗談に言った。

「いいえ、恋とはちがうんです」 「それが恋というものじゃないんですの?」

彼の顔は少し赤くなっていた。 龍之介は相手の冗談をむきになって打ち消したのを後悔した。

七

新聞記者、三十五歳、

妻道子二

謎の女 十八歲」

龍之介はすらすらと一息にレジスター〔register =記名する〕

して、ボーイに案内されて昇降機に乗った。 「八階」 二人が案内されて通った室は、正面に、ライティング・デスク^や

があって、中央にテーブルをはさんで粗末な椅子が二脚、室の両

側の壁よりに互いちがいになって二つのベッドがおいてあった。

ベッドが並んでいなくて、まあよかったと龍之介は思った。道

子もそう思ったらしかった。

ボーイが道子の大型のスーツケースと、龍之介の鞄とをおいて

出てゆくと、道子は一つのベッドの端に腰をかけて言った。

「ベッドが並んでいなくてよかったとお思いになったでしょう?」

「もし並んでたらどうなさるつもりだったの?」道子は相手の心 「ええ」龍之介は笑いながら答えた。

のうちを見すかしたようにずけずけ言った。

「そうしたら、せっかく並んでいるのをわざわざひきずって、 「そうだったら困っちまったとこでしたね」

間 もはなすおつもりじゃなかったの?」 「そんなことをしたかもしれませんねえ」

てかまわないじゃないこと? そう 仰 言 ったじゃないの昨日」 「だって、お互いの気持ちさえ光風霽月ならベッドが並んでたっ

33

謎の女 34 道子のこうした話し方に 壁 易 した。これはかなわんと思った。 龍之介は、相手の心理の動きを一歩一歩先まわりするような、

と同時にその大胆で、

ほとんど刻々と言ってもいいくらいに親密の度を加えていって、 んな女に恋しただろうと思った。彼女の彼に対する話しかたは、

かに魅力をも感じた。この女が独身の自由な身だったら、彼はこ

知性の閃きのある、洗練された会話にひそ

なくなりがちだった。 彼もそれに応じた言葉使いをしようと思ったが、どうもぎこち

いつのまにかなれなれしい程になった。

貴女をすきになったらどうします?」

龍之介は、道子の、ほとんど高圧的な言葉に対抗しようと思っ

相手の度肝をぬくつもりで言った。

「いまだってすいてらっしゃるじゃないの、ちがうかしら?」

「それじゃ、もし貴女を恋するようになったら?」

「結構ですわ、あたし愛されること大好きですわ、愛してちょう

だいね、どうぞ」

「そりゃわからないわ、神様でなくちゃ。恋愛というものはイン

「そうしたら貴女も僕を愛して下さる?」

スピレーションでしょう、不意に、自分でも気のつかないうちに

愛しているものなんでしょう。そうなったら、愛しちゃいけない

と思ったって防ぎきれるもんじゃないでしょう」 龍之介はつまらないことを言ったのを恥じた。そしてこういう

謎の女 いわ。でもあたしそんなに恐い女じゃなくってよ」 「貴方、 あたしを恐くなったでしょう? きっとそれにちがいな

女は愛しないことにしようと、ひそかに決心した。

龍之介は図星をさされて、ほんとうにこの女が気味わるくなっ

た。そして素性も名前も知れない女と、奇妙な一時的な同棲生活

を送ろうとしている自分を顧みて狐につままれたような気がした。

まま新聞を読んでいた。何となく気が落ちつかないで仕事が手に その夜、 龍之介はワイシャツ一枚になってベッドに寝ころんだ

つかなかった。

つづきの高架線には、 下の街路ではたえず、 列車がしょっちゅう行ったり来たりしてい 電車や自動車の騒音がしていた。東京駅

室内の温度は華氏八十度に近く、 龍之介は毛糸のシャツを着て

「僕浴衣と着替えてもいいですか、貴女もお着替えになったら?」

いたので、

肌がじっとり汗ばんだ。

龍之介は新聞を投げだして、起きあがって言った。

「どうぞ」

道子は座ったまま煙草をふかしていた。彼女はこのホテルに着

いてからつづけさまに、大っぴらで煙草をふかしていた。

「貴方もお着替えになって、おやすみになったら?

もう十一時

謎の女

過ぎましたよ」 「ええどうぞお先へ」

龍之介は洋服をぬぎっぱなしにして椅子の上へ丸めておいて、

ホテルの浴衣を着た。室内の温度は、ちょうどいい加減だった。

しになっていただきたいわ」

「貴方、ジェントルマンは、

毎朝プレスしたパンツだけは、

お召

道子は龍之介が脱ぎ捨てた衣類を畳みかかった。

「いいですよ、そのままにしといて下されば」

りませんよ」 「よかありませんよ、あなたはよくたって、妻のあたしはよかあ

ゃくしゃの衣類を整理しているところは、どう見ても家婦だった。 つつまれるような気がした。実際、彼女が、彼の脱ぎすてたくし 道子は、龍之介の洋服を片付けてしまうと、今度は自分のロー

端に腰をかけてシルクの靴下をぬいでいるところを、彼は眼を細 ブを脱ぎはじめた。彼女が脱いだローブをみだれ箱の中へ畳んで 入れて、コンビネーションとシュミーズだけになって、ベッドの

くあけて見ていた。 それから彼女は、 素足にスリッパを穿いて化粧鏡の前に立った。

龍之介は、時々その方を細眼で見ないではいられなかった。うす それから彼女は軽快に眉をひいたり、ルージュをつけたりした。

40 いシュミーズの下にふっくりした肉の輪郭が生き生きと動いてい

謎の女

るのが感じられた。

膚の上に匍いまわるような気がした。

が

はっきりと残っていた。何だか、ぬらぬらしたものが、彼の皮

龍之介は悩ましくなって眼をつぶった。しかし、

眼の底に残像

	4

青空文庫情報

底本:「平林初之輔探偵小説選2[#「2」はローマ数字、1-13-2

2] 〔論創ミステリ叢書2〕」論創社

2003(平成15)年11月10日初版第1刷発行

初出:「新青年 第一三巻第一号」

※未完の遺稿 1932(昭和7)年1月号

入力:川山隆

校正:門田裕志

41 2010年12月8日作成

青空文庫作成ファイル:

謎の女

w.aozora.gr.jp/)で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫(http://ww

	4	1

4	2

謎の女 平林初之輔

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL http://www.aozora.gr.jp/

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL http://aozora.xisang.top/

BiliBili https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks 青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/ ※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。 http://tokimi.sylphid.jp/